2007年度三鷹市立中原小学校キャリア教育事業評価概要

2008年3月16日

◇評価概要

2007年11月中旬より2008年3月上旬までの約4ヶ月間、東京都三鷹市立中原小学校にて実施されたキャリア教育事業の一環として、クレイ・アニメーション制作を中核とした授業が行われたが、同事業の評価方法として、2005年度及び2006年度と同様に外在化カードを用いた質的研究法を導入した。同評価活動を実施するにあたり、教育学及びコミュニケーション学の知見を持つ観察者が、定期的に同授業を見学し、同校の参加児童の言動及び意欲の変容を分析した。

外在化カードを用いた質的研究法として、クレイ・アニメーション制作を中心とした授業の終了時に、毎回、全ての参加児童に対して、同授業を通して学びそして気が付いた事柄を、外在化カード(メモ用紙の半分程度の大きさの用紙)に記述してもらい、後日、回収した同外在化カードを、下記に詳細を示した5つの評価基準「自己肯定傾向の変化」「自己発見傾向の変化」「役割把握・認識の変化」「職業理解の変化」「コミュニケーションの変化」に沿う形で、観察者の方で分類を行い、その分類結果から導き出せる参加児童の言動や行動の分析と評価を実施した。

◇分析手法

外在化カードを用いた評価手法は、学びという事象がいつどこにでも起こり得るという学習の状況論に基づいて、キャリア教育事業に参加する児童が同学習活動を通じて、その時々に感じたことや気が付いたことを、率直かつ簡易に書き残すことを目的としたものである。従来の感想文は、学習活動が終了した段階でそれまでの学習過程を、記憶を頼りに振り返り、清書形式でまとめることを主旨とするものが多い一方で、外在化カードは、授業時間ごとに毎回記述する形式を取るため、児童が感じたままの率直な学びの記録を記憶が鮮明の内に残すことができる特徴を有している。また、学んだことを、その場で書き残すという行為を意識的かつ継続的に行うことで、児童自身の学習履歴を明示化することが可能となるだけではなく、外在化カードを記述することが習慣化していく中で、学んだことを記述すること自体が、児童にとって本質的な喜びにつながるという利点を持っている。この学習履歴を外部に明らかにするという特徴が、外在化カードの名前の由来にもなっている。

また、学習履歴が時系列に示されることで、自らの学習活動全体を内省的に振り返ることを容易にするだけでなく、毎回の授業後に回収された外在化カードは、クラス単位で一つにまとめられ、各児童個人が学んだことや発見したことをクラス全体で共有することができる特徴も有している。

因みに、評価分析の対象となった三鷹市立中原小学校では、既にこの三年間、キャリア教育を通じて外在化カードを利用してきただけでなく、他の通常の授業においても積極的

に同カードを応用してきた経緯があり、同校のキャリア教育に参加する多くの児童にとって、外在化カードに学んだことを記述することは日常化し始めている背景があることを事前に記しおく。また、外在化カードの副次的な効果として、これまで短い文章を記述することに対しても抵抗感を示してきた児童が、少しずつ外在化カードを通じて、文章を組み立てていくことができるようになった事例が見られたという報告も中原小学校の担当教員から受けている。

◇評価基準

外在化カードの分析の指標となる評価基準として、アニメーション制作を通じたキャリア教育事業のインストラクショナル・デザインを行った教育学の専門家により、次のような 5 つの評価機軸を持つ評価基準が事前に設けられた。同評価基準に沿って、観察者によって参加児童が記述した外在化カードを毎回分析し、時系列的に参加児童の意欲や言動の変容を追った。

1. 自己肯定傾向の変化（参加への積極性：「やりたくなった」などの積極的な表現は、やろうとする自己に対する肯定傾向である。）
2. 自己発見傾向の変化（参加への意味付け：「おもしろかった」などの感想的な表現は、自己発見の端緒傾向である。）
3. 役割把握・認識の変化（自分の役割へのこだわり：「わたしにとって、この役割は」など役割についての意識を持つことが役割把握・認識の端緒傾向である。）
4. 職業理解の変化（働くことへのイメージ：外部講師等との交流、実践の職場体験を通して「働くって」など職業についてのイメージが明らかになることは職業理解が進んだといえる。）
5. コミュニケーションの変化（参加コミュニティへの帰属意識：「わたしのグループは」など帰属的な表現が出ることがコミュニティ意識の端緒傾向である。）

◇総合分析結果と考察

毎回のキャリア教育授業の終了時に回収された外在化カードを逐次分析した結果として、5 つの評価機軸を持つ評価基準に沿う形での総合分析結果及びそこから導き出される考察を下記にまとめた。時系列的な分析結果及び各授業終了時に毎回行われた分析結果については、参考資料として別紙にまとめてあるのでそちらを参照のこと。因みに、分析結果の分量としては、毎回およそ 400 字詰め原稿用紙で 15 枚前後、20 回の記録で、およそ 300 枚以上に至っており、下記にまとめたものは、そのごく一部を切り取ったものであることを記しておく。

1. 自己肯定傾向の変化

自己肯定傾向の変化に関連したコメント内容の変容についての総合的な評価として、先ず、絵コンテ段階からアニメーション制作作業が進展していくにつれて、本業と同様の制作プロセスと作業要求がなされたため、それぞれの作業内容の理解をするだけでも一苦労の状況が観察され、また各々の作業を実践する際にも、ほとんどの作業が未経験であったため、その都度困難を極めるものであったことを示唆するコメントが数多く見られた。しかし、その一方で「難しい」、「大変」、「疲れる」といったネガティブなイメージを含む単語と併記されて、「楽しい」、「面白かった」、「もう一度やりたい」、「もっと頑張ろう」などの肯定的な意味を含む単語がコメント内に多数見られたことは特筆される。これらの一見相反する内容を含むコメントが見られた背景には、困難な状況に直面した際に、それでもなお意欲的にキャリア教育に取り組む姿勢が、参加児童の中で養われたことがうかがえる。特に、本職と同様の作業工程を精一杯こなしていく中で、自分自身に自信を持ち始め、同時に自己肯定感を増していくことを通じて、中原小学校の参加児童の多くが、しばし不都合な状況に直面しても、それを避けることなく対峙し、乗り越えていくことができたことは高く評価される。このような自己肯定感を持って物事に取り組む姿勢が培われることは、キャリア教育を公教育の中で実施する際に、最も重要な学習要件の一つになるはずである。

次に、作品の完成が見え始めてくる段階に至ると、時間的な制約やインフルエンザ等の病気による欠席児童の続出による労働力不足に陥るグループが見られ、それ故にかなり忙しい作業状況が散見されたが、その一方で上記と同様に「疲れた」けど「満足した」や「よくできていた」など、一見矛盾する内容を含むコメントが増加していったことが特筆される。このようなコメントが多数挙げられた背景には、登山で言えば、山頂が見え始めることで、その最後の工程が最も険しかったとしても、それを苦にしないだけの充実感と達成感を持って制作作業に取り組んでいたことを意味しており、最後まで登りきるだけの自信と自己肯定感が、それまでの学習過程において十分に養われてきたことの証と言えるであろう。

中原小学校では、次年度も継続して今回参加した 5 年生の児童全員が、そのまま 6 年生に進級した段階で、再度、アニメーション制作を中心にしたキャリア教育に取り組むことが予定されているため、その際に今回の制作活動の中で体験し、学んだことを、次年度にも積極的に活かしていくことが期待される。

2.　自己発見傾向の変化

自己発見傾向の変化に関連したコメント内容の変容についての総合的な評価として、先ずほとんどの参加児童にとって、アニメーション制作は始めての体験であり、またアニメーション制作の本職とほぼ同様の制作工程を踏襲する形式を取ったため、各制作段階で要求される作業内容の全てが初体験となったことから、実際に作業を体験する毎に数多くの知見の発見やスキルの体得が行われていたことを示唆するコメントが時系列的に継続して最後まで見られたことは特筆される。このような知見を毎回発見することは、参加児童の

知識の幅を広げるだけでなく、キャリア教育以前に培ってきた知識や経験を、キャリア教育を通じた実践的な活動の中で再定義することを促し、また同時に今回のキャリア教育にて学んだことを、日常の学習活動の中で活かすことにつながっていくことが期待される。特に、アニメーション制作は、絵を書くという基本作業以外にも、セルの枚数と撮影秒数の関係を計算して、その予測に基づいて絵コンテを制作する際には、数学的な能力が要求され、また予測されたセル数と撮影秒数を実際に制作作業に反映させるためには、マネジメント能力や人間関係の調整能力を伴う高度なコミュニケーション能力が求められることになり、単純に必要枚数の絵を書き撮影すれば終了するというものでは決してない。そのため、それぞれの作業の局面において、異なる能力やスキルが求められることになり、必然的に様々な発見や学びを引き起こすことにつながっていた。当然ながら、各々の作業状況において突発的に要求される能力やスキルの全てを、個々の児童が十分に習得することができたかどうかを問うことは難しいが、一方でそのような要求が存在していることに気が付き、そしてできる限りの対応した経験を持つことができただけでも高く評価されよう。

3.　役割把握・認識の変化

役割把握・認識の変化に関連したコメント内容の変容についての総合的な評価として、先ず、二年続いてキャリア教育を行ってきた実績に基づいて、アニメーション制作を中心としたキャリア教育に対する中原小学校の担当教員の意識が高まることで、今年度の授業では、早い段階から参加児童に対してアニメーション制作に準じた役割や作業分担を、参加児童の中で明確に意識付けさせることを行ってきたが、キャリア教育の開始当初は、実際にどのような役割や職種がアニメーション制作産業の中に存在しているのかに関する認識が低い様子がうかがえ、役割把握・認識の変化に関連したコメントがほとんど挙がってこなかった。しかし、近郊のアニメーション・スタジオで働く現職の外部講師を招き、アニメーション制作の実態の一部を紹介することで、各々の制作工程に携わる役割や職種の存在を学び始め、また実際に自分達の手で作品を制作し始める段階になると、急激に役割把握・認識の変化に関連したコメント数が増加し、その内容もグループ内で分担した作業の内容を詳述したものや、そこで果たした作業成果に関するものが多く見られた。役割意識を徹底させる中で、制作作業の終盤には、自分の分担作業を終える児童も出たグループが見られたが、それでもなお役割終えた児童が、自分のグループに対して他にどのような貢献ができるのかを自問するコメントが現れたことは、特筆できる点である。

制作作業の進行が深まるにつれて、役割把握・認識の変化に関連したコメントが増えていく中で、作品の完成が見え始めてくると、個々の児童が担った作業がグループ作業全体の中でどのような役割を果たしたかに関するコメントや、自分の役割を通じてグループに対して貢献ができたことに対する満足感や達成感を示すコメントが見られるようになった。このような集団作業の中での個々の役割の把握と役割に応じた貢献に対する満足感を示すコメントが挙げられたことは、今回のキャリア教育を通じた学習活動が、集団（社会組織

の一端）の中で、自分の能力を確かめことを通じて、児童一人一人が自分に自信を付けていく絶好の機会として機能していたものと考えられる。

4.　職業理解の変化

職業理解の変化に関連したコメント内容の変容についての総合的な評価として、先ず絵コンテレベルの企画発表会の際に、外部講師として招いたアニメーション・スタジオの本職の方々による参加児童が描いた企画案に対する厳しい意見を含む批評が行われたが、それを素直に受け止め、プロフェッショナルな人々が持つ視点や職業観がどのようなものであるのかについて認識したことを示すコメントの傾向が見られた。特に、観客に見てもらえる作品を作ることの重要性について、少なからず理解を示したことは特筆される。ただし、必ずしも自分達の作品の制作活動において、このような本職からの指摘を実践できるだけの、経験に基づいたスキルや知見は持ち合わせてはおらず、また、小学 5 年生の発達段階で安易に習得できることを期待すること自体に無理があるものと考えられる。そのため、このような意識を少なからず感じながら制作作業を行っただけでも職業理解の変化があったものとして評価される。

次に、中原小学校でのキャリア教育の締めを飾るイベントとして、校内発表会（5 年生の児童のみ）と、参加児童の保護者を中心とした校外発表会が催されたが、その折に記述されたコメントの多くから、改めて自分達の作品に対して第三者である観客から肯定的な評価を受けることの難しさを学んだことを示すものが多数見られた。キャリア教育としてアニメーション制作を行う以上、作品が出来上がって完結するものではないため、作品の完成はそのまま自分達の仕事の成果としても社会的に受け止められるため、他者から評価を受けることもその仕事の一部であることに気が付いたことを示すコメントが多数見られたことは評価に値するであろう。

次年度継続して同校にてキャリア教育が実施された際には、より観客の視線を意識した作品作りを行っていくものと考えられる。このようなプロフェッショナルとしての責任感や職業観などの意識を養うことを、同校では中長期的に見据えてしっかりと捉えている点は、高く評価される。

5.　コミュニケーションの変化

コミュニケーションの変化に関連したコメント内容の変容についての総合的な評価として、先ず、制作作業が始まると伴に、グループ内での結束と各メンバー間の協力関係が、作業の進行度合いと作品の質の向上の双方に重要な影響を与えることに気が付いたことを示すコメントが継続して見られたことは高く評価される。キャリア教育においてアニメーション制作を選択する意義の一つとして、個々の児童の個人の能力の発揮が求められると同時に、集団作業が必然的に伴う職業分野なため、グループ内での相互協力と連携が強く要求される点が挙げられる。ただし、必ずしも順調に制作作業が進行していったわけでは決してなく、外在化カードに記されたコメントの記録には、グループ内での諍いや不協和

音があったことを示唆するものが多数見られた。集団作業を必然的に要求されるアニメーション制作において、このようなメンバー間の対立は、避けることが難しい面があり、キャリア教育である以上、グループ内で問題が発生しても、それを自分達の手で適宜解決し、そして責任を持って自分達の作品を完成させていくことが求められるが、本年度の中原小学校の参加児童は、問題が発生すれば、グループ内のメンバー間で何度も話し合い、多少不満や意見の食い違いが残ったとしても、作品を仕上げるという共通目標を失わずに、どのグループも最後まで脱落せずに、作品を完成させるに至ったことは特筆される。現実のアニメーション制作の現場においても、キャラクターの動作を示す線の一本まで納得いくまで、アニメーター間で意見を交わすことが当たり前の世界なため、対立を避けることなくメンバー間で十分なコミュニケーションを図り、適宜、問題を解決していく能力を養うことができたことは、同校でのキャリア教育を実施した最大の成果の一つとして挙げられよう。

◇総評

本年度、中原小学校にて実施されたキャリア教育事業では、一昨年度及び昨年度に引き続いて、同校の 5 年生全員がクレイ・アニメーション作品の制作活動に参加したが、同校では、来年度（2008 年度）も引き続きアニメーション制作を中心としたキャリア教育事業を実施予定としているため、長期的な視点に立った授業計画を練っており、本年度はアニメーション制作という職業の実態を少しでも理解すると伴に、事前に十分な企画を立てることの重要性と責任を持って自分達のグループの作品を完成させることを第一の学習目標として優先した側面が観察された。特に、責任を持って期限内に自分達の作品を完成させるために、個々の参加児童の役割意識の向上が見られた点や、グループ内のメンバー間で強固な結束と協力関係を築いた点は高く評価される。

また、自己満足に陥るのではなく、第三者の観客が見ても面白いと感じてもらえる作品内容に仕上げる点も、制作作業の折を見てしばし担当教員や外部講師から強調されていたが、ほとんどの参加児童にとってアニメーション制作は初めての体験だけに、過去に得た経験や知見との比較や参照が上手く行えず、観客を満足させるための具体的なスキルや技を制作作業の中から実践的に学び取っている段階にあるため、当然ながらプロフェッショナルによる作品とは比べようがない内容となったことは否めない。しかし、第三者からの評価を受けることに対する意識は明らかに向上しており、観客が面白いと思うものを作るのがアニメーション制作の仕事の基本であるという本職の外部講師による指摘を、制作作業の時々において内省的に振り返り、自分達の作品を見直して考える言動が、外在化カードを通じてしばし見られたことは高く評価される。この点については来年度以降の活動の中で、より明確に意識付けがなされていくはずであり、その結果として作品の内容にも反映していくものと期待される。

学習活動の側面以外に、中原小学校でのキャリア教育の実施を支える枠組みについても、

特筆される点が数多く見受けられた。特に、同校では継続して二年間既にアニメーション制作を通じたキャリア教育を実施してきた実績を持ち、その中心となって同教育を支えてきた同校の 5 年生の担当教員の指導能力が格段に向上しており、キャリア教育の目的や学習目標に対する教員側の理解がかなり深化していることは明らかであった。そのため、どの時点で参加児童がどのようなことを学ぶことが期待されるのかを、事前に予測することが可能となり、その目標に合わせた授業設計と学習デザインが成されたことで、二年前に初めて同校でキャリア教育を実施した際と比較しても、外在化カードに記載された文章量及び内容に顕著な飛躍が見られた。二年前の時点では、授業設計及び学習デザインのみならず、評価手法としての外在化カードの利用についても手探りの状態にあったが、それぞれが確固とした形で整備されていくことで、担当教員の側にも先を予見できるだけのある種の余裕が出始めたものと推察される。そして、外部からの協力を必要とする部分と参加児童に対する直接的な指導を必要とする部分との境界線についても明確になっていくことで、参加児童の自発的な学習を支える形での指導が上手く発揮されていたことは高く評価される。

以上の通りに、本年度のアニメーション制作を中心とした中原小学校におけるキャリア教育では、5 つの評価指標のそれぞれにおいて高い学習効果を示しており、参加児童個々人のスキルや能力の向上が垣間見られただけでなく、集団作業を通じたグループとしての様々な共有知が生起する状況も、外在化カードを通じて観察されており、それ故に同校において、キャリア教育を次年度以降も継続して実施していくことが切望される。